

第十六回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

第8巻

Lama 班禅喇嘛)

- p. 436 バルド・トードル (Bar-do thos-grol)
- p. 461 パンチェン・ラヤ (Pan-chen bla-na, Panchen

p. 147 フトクト (呼図克図, Khutukutu)

p. 149 フトツ (Bu-ston)

p. 238 ベル (Sir Charles Alfred Bell)

p. 296 ボーグル (George Bogle)

p. 323 ボラネ (Pho-lha-nas, 頗羅那)

p. 330 ボン教 (Bon)

p. 362 マハーヴェツトパチ⁴ (Mahāvayutpati)

p. 411 ミラ・レバ (Mid-la ras-pa)

第9巻

p. 97 ユク (Evaniste Régis Huc)

p. 327 リンチェン・サンボ (Rin-chen bzang-po)

p. 361 ヴーリヒ (Yuriij Nikolaevich Renkh)

一九七九年のクリルタイは、七月十五日(日)より十八日(水)まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開かれた。出席者は左記の五十三名である。

青木富太郎、荒川正晴(早稲田大学)、塙博(同)、海老沢哲雄(埼玉大学)、永島勇二(国士館大学)、福原一夫(金沢大学)、二木博史(東京外国語大学)、後藤晃(山形大学)、林徹(東京大学)、林俊雄(古代オリエント博物館)、樋口康一(京都大学)、堀川徹(京都大学)、細谷良夫(弘前大学)、茨木久一郎(明治大学)、石橋秀雄(立教大学)、石橋崇雄(東京大学)、金崎誠(株式会社シルクロード)、神田信夫(明治大学)、堅田裕司(東京大学)、川上晴(大阪大学)、川瀬豊子(同)、菊池俊彦(北海道大学)、北川誠一(同)、北村高(竜谷大学)、窪田新一(大正大学)、国木田明子(竜谷大学)、間野英二(京都大学)、松村潤(日本大学)、松崎光久(早稲田大学)、三木薫(同)、宮脇淳子(大阪大学)、森川哲雄(九州大学)、長沢和俊(早稲田大学)、小谷仲男(鳥取大学)、岡田英弘(東京外国語大学)、岡本孝(金沢大学)、大西澄子(東洋文庫)、大沢陽典(立命館大学)、佐伯有

一(東京大学)、榎原史子(早稲田大学)、佐藤次高(お茶の水大学)、沢田勲(金沢経済大学)、設楽国広(東京都立第二商業高等学校)、島田正郎(明治大学)、鈴木隆一(早稲田大学)、高木雅弘(明治大学)、田中宏巳(防衛大学校)、植村清二(国士館大学)、梅村坦(東洋文庫)、若松寛(京都府立大学)、山田信夫(大阪大学)、山本朗(明治大学)、吉田金一。

前年は病後で、第一回以来皆出席の例を破って欠席された植村先生が、めでたく本復して再び出席されたことと、吉田金一先生が初参加されたことが、今回の特徴であった。また佐伯有一氏が出席を快諾され、中国学界の現状について、貴重な情報を提供されたことは、特筆に値する。

七月十五日(日)は Registration。十六日(月)の午前九時三十分から、恒例の Confessions をもって開会した。

青木はホトゴイト部の研究を継続。荒川は卒論でトゥルフアン文書の田制、水利を扱う。茨木は卒論には敦煌の消費賃借文書を論じ、突厥の官称号を研究する。植村は『シルクロード』において、ティムール時代にマワランナフルに居たジャライル等モンゴル系部族は、ドゥワからタルマシリンに至る、チャガタイ・ハーン家の西移の時期に采邑を獲たものかと推測。また『万里の長城』を中公文庫に収めて再刊。梅村は『シルクロード』に連載した『東西交渉史文献目録Ⅰ中央

アジア』を単行書にまとめ、『東洋学報』にウイグル語辞典を評し、『史学雑誌』の「回顧と展望」に「北アジア」を執筆。永島は卒論「朝鮮神話考」を提出、イラク古代文化研究所に勤務。海老沢は「加賀博士還暦記念中国文史哲論集」に「モンゴル帝国の対外文書をめぐって」、「歴史学の現状と課題」に「遼・金・元」を執筆。大沢は『立命館大学文学部五十周年記念論集』に「石関と李農」を書き、『アジアの歴史』の北アジア、中央アジア、イスラム以前のインドを担当。大西は東海大学の修論として「Göktürk, Arab, Hittite, Bo from Sogdian」までの Bon 教」を書き、タントリズムに興味を持つ。

岡田は『シルクロード』に連載した「中国意外史講座」を完結。前年十二月から本年二月まで『サンケイ夕刊』に「直言」を執筆。『宮中檔康熙朝奏摺』中の満文書翰によった「康熙帝、朱筆の陣中便り」を『諸君ノ』に発表。また『中央公論』に「魯迅のなかの日本人」を書いた。朝日カルチャーセンターにおいて「謎の倭国」、「古代東アジアの歴史と文化」を講じ、「モンゴル文学史」―草原の叙事詩をたずねて」を開講した。アジア・アフリカ言語文化研究所における満文データ・プロジェクトは『満文老檔』、『旧満州檔天聰九年』、『年羹堯奏摺』を完了、現在『金瓶梅』が進行中。なお岡田は、前年の会で台北の故宮博物院の昌彼得が声明した第五屆東亞阿爾泰学会(Fifth East Asian Altaistic Conference)は、いよいよ

よ本年十二月末に台北において開催される見通しとなったことを報告した。

岡本は『北陸史学』に「元末期における義兵について」を發表。小谷は国士館のイラク調査隊に加わって、ハムリン・ダム水没地域の第三回発掘に従事。堅田はトルコ学を志す。金崎はその主宰するシルクロード文化研究所講座がすでに三百名を超す卒業者を出し、現在モンゴル、トルコ、アフガン(ダリ)、アラビア、中国、チベット、ウルドゥ、ペルシア、ヒンディ、ベンガルの十言語を提供、ウイグル、ウズベク両語を準備中。川上は修論「十八世紀カザフ史に関する一考察」において中オルダのアブライ・ハーン政権を論じた。川瀬は『オリエント』に「ダーラヤワウ一世の治世下の祭儀と王室経済」を發表。

神田は『東洋学報』において『宮中禮雅正朝奏摺』を評し、『東洋文庫書報』に Pope-Harritz Okada の目録にもれた満文文献を紹介。細谷らとともに『鑲紅旗檔』の乾隆朝の部分の整理に着手。東洋文庫所蔵の世管佐領執照四点、自家架蔵の鑲黃旗齊々哈爾達呼爾佐領執照を研究中。

菊池は『北方文化研究』に「オホーシク文化の起源と周辺文化との関係」を發表、同文化が七世紀に最盛期に達して十三世紀に衰亡期に入ることから、六四〇年に唐に朝貢した流鬼をその担い手に当て、その正体を一二六四年に骨鬼に圧迫

されていると史上に姿を現わす吉里迷(ギリヤーク)とする。北川は十三世紀のモンゴル帝国とコーカサスの諸民族、ことにグルジアとの関係についてドーソンの誤りを正し、バーブルのインド侵入以前から、トルコ・モンゴル系の地方勢力がすでにあつたと考え、チェルケスとバタンの社会はよく似ていると指摘した。北村は大谷文書の再整理に従事。国木田はソ連領中央アジア、アフガニスタンを旅行、修論には中国のガラスを扱う。窪田は「元朝秘史におけるジャムカ」を卒論とし、清朝時代のボグド・ゲゲーンの支配形態を研究。後藤は『中東ハンドブック』に家族、部族観を、『シルクロード』に「沙漠民の部族構成原理」を書いた。

榊原は綏遠青銅器の、ミヌシンスク、中国の青銅器文化との関連を研究。沢田は突厥碑文研究会でオンギン碑文を読み、また北陸ユーラシア文化研究会が現在十六名の会員を擁すると報告した。設案は『オリエント』に「青年トルコ人革命の前夜」を書き、オスマン朝末期の年報を読み、三・三一事件の動向を明らかにしようとする。鈴木は北宋の青唐族について調べる。高木は金朝の言語政策、言語問題、言語接触の研究を志す。田中は『阿南惟敬遺稿集』の近刊を報じた。

塙は漢代の羌族の反乱を研究。林(徹)は修論「トルコ語の複数接辞について」を提出、トルコ語の KWIC プログラムを作る。林(俊)は古代オリエント博物館に江上波夫が寄

贈した蔵書二〇〇〇点を整理、シリアの調査に参加し、ユーフラテス東岸のローマ時代後期の城塞址と青銅器時代のテルを発掘。樋口は修論に『蒙語老乞大』を扱い、仏典のモンゴル語を研究。福原は五胡十六国時代の匈奴国家の研究を志す。二本はモンゴルに三年間留学、修論には十六世紀の法典（白樺法典、アルタン・ハーン法典、ブリヤート法典）を扱う。

午後は、三時から Confessions を継続した。

細谷は『元功垂範』の異本を香港大学図書館で発見、『清語摘鈔』の「摺奏成語」の索引を『弘前大学紀要』に発表、『鑣紅旗檔』乾隆朝の分四〇〇〇点近くを整理中。また内モンゴルに旅行し、北京、フヘホト、ウラントク人民公社、蘭州、上海を経、内蒙古大学図書館において『滿文総鑑』なるものを見た。堀川は『歴史公論』に「脱シルクロード」、「シルクロード」に「ウズベク族とティムール朝」を発表。松崎の修論は「西突厥混乱期の一解釈」である。

松村は『年羹堯奏摺』、Nisan saman i bitne を講読、敦煌の明清時代史を執筆中。また『昭和五十三年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書 課題番号二二一〇六〇 内陸アジア社会史研究』を刊行。間野は『中央アジアの歴史』（講談社現代新書）を出し、『朝日アジアレビュー』に「中央アジアとシルクロード」、「オリエンツ」に「ティム

ール朝における一貴顕の系譜」を書き、Acta Asiatica のエグリスタンの項を担当、ナクシユバンディヤ運動に注目。三木は日本政治経済史から転じて遊牧と農耕の關係、ことに北魏の漢化政策を研究。宮脇は十七世紀のハルハ・モンゴルの左右翼対立について論ずる。森川は「チングンジャブの乱について」（『九州大学教養部歴史学地理学年報』三）、「チンギス・ハーンの亡霊」（『九州人類学報』六）を発表。

山田は近く『古代テュルク史覚書』を発表するが、その一部は「突厥に関する二章（覚書）」として松村の『研究成果報告書』に収められた。また『東洋学術研究』に「ウイグル王国の仏教文化」を書く。特定研究「文化摩擦」では、豊川正子とともに神戸の華僑呉錦堂を研究。科学アカデミー・アルタイ学研究グループの招待でハンガリーを訪問、リゲティと面会した。山本は西トルキスタンのテュルク系遊牧民の研究を志す。吉田は、綏芬河の十九号界標付近に一年半駐屯した経験、実見したセミョーフ軍付の日本人将校の打った仮名書きロシア語電報綴り、メリホフの柳条辺増説を批判してかえってソ連に招かれて歓迎されたことなどを語った。

若松はホトゴイトのアルトゥン・ハーン三代、康熙朝のジリン活仏について書いた。今後は青海のチャガーン・ノムン・ハーンと、十七世紀後半のハルハのザヤ・パンデिताの著作『自叙伝』、『ボグド・ゲゲーン一世伝』、『エルデニ・パン

ディタ伝』を研究したい。ブリヤートのラマ教については、松村の『研究成果報告書』に「パンディタ・ハンボ・ラマの成立過程とその補任」を寄せている。

四時三十分から海外事情報告(一)として、二木が「モンゴルの学界」について語った。

二木は三年間、交換留学生としてウランバートルのモンゴル国立大学の歴史科でベルレーに学んだ。大学は五年制で、十八歳で入学するが、学科によっては四年制のところもある。大学は六校あるが、大学での研究は低調で、主たる研究機関は科学アカデミー、農牧省など政府機関の研究所、モンゴル人民革命党中央委員会付属の研究所などである。

アカデミーには歴史研究所、言語文学研究所、東洋学研究所、哲学社会学法学研究所などがある。

歴史研究所は所員六十名前後。所長ナツァクドルジは清代モンゴル史の専門家。副所長セルオトジャブは考古学者。考古学部長はドルジ、歴史学部長はスフバートル、現代史部長はサンジドルジ。

言語文学研究所は所長がロブサンデンデブ、言語学部長がソミヤーバートル(朝鮮語)、文学部長がツェレンソトノム(ベルリン・トゥルファン文書)、芸術部長がロブサンワンダン(文学)、専門用語委員長がシャクダルスレン(言語学、リンチュンの弟子)、百科辞典編纂委員長がグルバザル(翻

訳理論)。

東洋学研究所は中国研究が中心で、日本語のできる人が三名、ほかにヒンディ語など。所長はビラ(文化史、史学史。Roachの弟子)、副所長はインジヤムツ(元朝以後の中国史)。

哲学社会学法学研究所の所長はジュクデルで、モンゴル人のチベット語による著作を研究する。

人民革命党中央委員会の党史研究所は、所長がバルドー、副所長がミニス。

モンゴルにおける研究は、モンゴル学をモンゴル人の手に取りもどすことを目標とし、傾向としては学者・文化人の果たした役割の評価と、チベット語文献を使った研究が目立つ。一九七六年のモンゴル学者大会以後に現れた業績としては、次のようなものがある。

ダムディンスレン『大学者ミヤンガト』(正白旗蒙古出身の数学者明安図の伝記、業績)

ジュクデル『アグワンバルダン』(Yag dang dpai idan)の哲学思想

ナツァクドルジ『モンゴル封建制の基本的過程』(ウラジミールツォフの批判的継承。日本人学者の業績をよく利用している)

ゴンゴル『ハルハ史 巻二』

ブレブジャブ『モンゴル仏教史』

セルオトジャブ『モンゴル古代史』（青銅器時代から契丹まで）

ドルジ、ツェレンドルジ『モンゴルの旧石器時代』

ワズイルハーン『カザフ・モンゴル辞典』

ツェレンソトノム『モンゴル韻文の理論に関する若干の問題』

ザクトスレン『ジャンガル・テキスト十種』

続いて五時二十分から研究発表（一）として、樋口の「羽田享旧蔵、蒙古仏典写本断片について」があった。

この写本は *čindamani nom erdeni tonliqu-yin quva čineg* と題し、末尾を欠き、内容は多数の仏典の引用より成る。奥書がないので成立年代は不明だが、語彙、文体の古風さから、十三～十七世紀の *pre-classical* 時代に属すると見られる。

同夜は二本のスライド映写でモンゴルの風物を鑑賞した。

十七日（火）は、午前九時三十分から、遅れて到着した人々の *Confessions* があった。

石橋（崇）は清初のバヤラ制を研究し、清代の社会、軍事制度の研究を志す。石橋（秀）は『明実録』の反乱関係史料を抽出、洪武朝の整理を終り、『古史弁』の訳を完成した。

佐伯は明・清の地主文書を読み、また『元典章』を宋代史の

専門家とともに研究する。佐藤はミスカワイフの『年代記』を読み、『東洋文庫欧文紀要』に「マムルーク朝におけるイクター制の展開」を寄せた。島田は『蒙古例』の研究を継続、『督捕則例』の研究を計画。『東洋法史論集』第一冊は既刊、第二冊は年内に刊行の予定、第三冊は準備中。考古学関係の著作は別に二冊とする予定。別に中華民国で『中国法制史資料彙編』第一輯四冊を出した。第二輯も続刊される。長沢は『シルクロード史研究』を出版、カロリシュティイ文書を整理、『史観』に「拘弥国考」を書く。

九時二十分からは海外事情報告（二）として、佐伯の「中国社会科学院と中国の学界」があった。

佐伯は六月八日～二十二日、社会科学院の招待で、古島和雄とともに中国を訪問、各地で明・清史、近代史、経済史の研究者と会談した。

社会科学院（院長、胡喬木）は國務院の管轄だが、国家計画委員会に直属する科学院より力は弱いようである。社会科学院の組織は、院部に院長、副院長（数名）、秘書長、副秘書長（数名）が居り、その下に科研組織局、規画局、基本建設局、財政局、行政管理局、外事局、弁公室を置く。管下の研究所は二十、ほかに現代史研究室がある。その一つの科学情報研究所は、全世界の學術情報を蒐集して、一般的インデックスを作っている。

各研究所の基礎単位は研究室で、たとえば歴史研究所は、秦漢研究室、魏晉南北朝研究室、宋遼金元研究室、明史研究室、清史研究室より成る。ほかに各研究所に編訳室があり、外国の研究業績を翻訳して内部に回覧している。

地方の研究機関としては、各一級行政区に哲学社会科学研究所を置き、革命委員会がこれを統轄する。中央の社会科学院には隸属しないが、協力の義務はある。ただし国際交流に関しては、最終的には北京の外事局が集中管理を行う。

大学の基礎単位は教研室で、ほかに付属の研究室、研究所がある。こうした研究機関の数は大学によって非常に異り、南京大学は五研究所を擁するが、中山大学や復旦大学にはほとんどない。

研究機関の人材不足は深刻で、十数年前の三分の一のスタッフしか残っていない。三分の二は文革で肅清されたか転職させられたのである。そのため研究所が研究生（大学院生）を募集して養成するという臨時措置を講じ、また転職者の呼びもとに努力しているが、永年の空白のため、たとえば復職しても研究能力があるか疑問である。

各分野でそれぞれ再建策を練り、広く討論中であり、経済と歴史だけはすでに全国的な規画会議を開くことに成功した。歴史はこの四五月に成都で会議を開き、黎澍、傅衣凌、戴逸、陳慶華が基調報告を行い、古代史（阿片戦争以前）と近代史

に分れて討論を行い、断代、課題ごとの報告をまとめた。共通の課題としては、通史の改善、農民戦争史、封建時代における思想史、民国史、新民主主義革命史、史料蒐集の強化が挙げられた。このうち通史は、これまで重複が多かったため、地区ごとに分担を定め、たとえば秦漢史は西安が担当することとした。また研究会を公認したが、これは将来、研究所または学会にそれぞれ発展することになっているので、注目を要する。社会学会研究会、日本問題研究会などは研究所になることが決まっている。研究会は専門家だけの集まりだが、学会には誰でも入れる。全国学会ばかりでなく、南京歴史学会など、地方的なものもある。

研究の内容については、明清史、近代史、経済史に的をしぼって、研究者と面談した。

明清史の研究の中心は、北京の社会科学学院歴史研究所の明史研究室、清史研究室のほか、人民大学清史研究所、天津の南开大学明清史研究室、吉林大学、遼寧大学、南京大学などである。南京大学には科研処副処長洪煥椿があり、百人の学生を動員して十六〜十八世紀の史料を蒐集中で、すでに江蘇省一带の碑文をほぼ集めえた。来年から出版されるが、最初は『松江碑刻選集』の予定。

史料集の出版の準備が進んでいる。社会科学学院歴史研究所は『清史資料』の版を大きくして継続することになり、二冊

が印刷中である。その他、故宮博物院明清檔案部の文書によった『乾嘉刑科題本中租佃史料』、同『農工商雇傭史料』、『嘉慶年間白蓮教史料集』が近刊になる。地主文書は各一級行政区レヴェルで扱っていて、北京はもっぱら中央の檔案に研究を集中している。

故宮博物院明清檔案部は文化部の所管で、四階建ての建物に九十人が働いている。中国人でもなかなか入れないという。所蔵の文書は明の洪武十年がもっとも古く、明代では天啓、崇禎年間のものが多い。もちろん清代がもっとも多い。

近代史の研究機関は、社会科学院近代史研究所、南開大学、吉林大学、遼寧大学、上海大学、武漢大学、中山大学などで、上海市哲学社会科学研究所の湯志鈞が中心人物。人物本位の史料集を出す方針である。

近代経済史は、社会科学院だけのようだ。これは経済の社会主義改造のため、政府機関が資料を蒐集して北京に集めてしまったためで、地方には何も残っていない。たとえば人民銀行、工商管理局などに資料があり、研究者に公開されていない。現代史に至っては全く研究が存在しない。これはむしろ政府のトップ・レヴェルの人に聞いた方が早く、大学人には資料も情報もなく、手も足も出ないようである。

どここの研究機関でも、三十八九歳から五十五六歳までの間に、実際に研究プロジェクトを推進し史料を取り扱う能力の

ある人が集中していて、その上は七八十歳代まで中間が欠けている。三十歳代は文革世代なので、教育らしい教育を全く受けていない。現在、教育部の依頼で、進修教師制度が実施され、七八十歳代の老先生たちが三十歳代の大学教員の再教育に当たっている。この進修教師が全国の大学スタッフの三分の一にのぼるという。

満洲語文獻の研究に従事するのは満族出身の十一名で、近く『滿文老檔』の漢訳を出すという。

中食後、遊覧船による湖上一周と弁天島訪問があった。

午後三時からは研究発表(二)として、林(徹)の「トルコ語複数接辞について」があった。同一文内に「*ber*」が反覆される度合は、中間にはさまる語数が多くなるほど高まるという見通しをのべたものである。

四時からは Symposium「宗教と国家——」を山田が司会した。

間野は「イラン革命の現場から」を語った。昨一九七八年八月十五日にテヘランに着いて、十九日にはアバダンの映画館焼打事件が起った。政府は反シャー派のしわざだと言ったが、民衆は SAVAK の反シャー派弾圧の陰謀と言っていた。九月八日、テヘランのジャレ広場でデモ隊に軍隊が発砲、死者多数を出す大惨事(黒い金曜日)があり、戒厳令が出た。これに反抗して各地にストが続発、官庁や大学も休業のまま

となる。十一月五日、銀行、映画館、酒屋などの打ちこわしがあり、軍事内閣が組織されたがストは収まらず、十二月十一日のアーシュラー（フサイン殉教記念祭）とその前日、五十万〜百万人の反シャーの大デモがあり、実力を誇示した。

石油、電力労働者およびバザールの商人たちのゼネストが広がり、生活は苦しくなったが、市民の苦情はなかった。シャーは柔軟政策に転じ、反シャー派のサンジャビに組閣を交渉して断わられ、バフティヤルがシャーの出国を条件に組閣を承諾したのが一月六日。十六日にはシャーが出国し、二月一日、ホメイニが帰国、四日、バザルガンを首相に指名して政府が二つになる。十日、シャーの親衛隊が空軍基地を襲撃、これをきっかけに革命派はじめて武装して空軍の支援にかけつけ、翌十一日、軍隊の中立宣言が出て革命は成功した。

イランのイスラムには、聖職者が厳然と存在している。全国八万個所のマスジド、イマームザーデ（聖廟）に居る者のうち、高度の神学教育を受けて世人の尊敬を集めるアーヤトッラーは約千二百人、そのうち最高のアーヤトッラー・アル・オズマーは六人。ホメイニはそのひとりで、十六年間イラクに亡命生活を送りながら、シャーの批判を続けた。聖職者の生活を支えるのはバザールの商人で、民衆と聖職者の関係は密接である。それで民衆の不満を聖職者が代弁したまでで、もともと民衆はイスラム共和国の理想のために革命運動をし

たわけではないから、革命が成功すると、異なる路線の間の摩擦が出てくる。ホメイニとその側近にはこの点の認識が足りないようである。

佐藤は「アラブ社会の現実と理想」と題して、中近東にアラビア語文献の購入に行つて、今一九七九年三月二十六日のエジプト・イスラエル和平条約にぶつかった経験を語った。サダトはアラブ諸国の反応の読みが甘く、サウディ・アラビアが最終的にはエジプトについてくると思っていた。翌二十七日のバグダードの外相経済相会議でエジプトに対する全面制裁決議がまとまったが、このとき近年穏健化しつつあるホストのイラクが巧みに会議をリードし、サウディ・アラビアがこれに同調したのがサダトの誤算であった。

和平条約をアラビア語で *tawfiq al-salam* というが、四月二日のアル・アクバル紙によると、イスラエルは *suqut* を提案し、エジプトが *salam* を主張したのだという。スルフは恒久的な平和、サラームは戦争状態の不存在を意味する。エジプトはこの条約を、スルフに至る第一歩と見なしたのだという。カイロ市民の受けとり方は、サラームはまあまあじゃないか、といったところで、どうももう一つ盛り上らない。たまたま三月二十六日はイスラム暦一三九九年ラビア第二月二十八日で、*Mawlid al-Husayn*（フサイン生誕祭）に当たったが、この日のアズハル広場はすごい熱気で、和平よりも

この方に人氣が集まっていた。三十一日にはサダトが帰国するので、色電球をビルから垂らし、道路に横幕を張り、広場にサダトの肖像と白い平和の鳩を立てていたが、その飾りつけは予言者の生誕祭などのときと全く同じであった。どういうわけか、エジプトの元首は宗教性を誇示する傾向があり、帰国の翌日、サダトが白い服を着て礼拝に行くところが新聞の一面に大きく写真で出たりした。サダトの売り物は額の礼拝だこ（ザビープ）なのである。

表面には出ないが、批判派も居るようで、ナセル主義者とムスリム同胞団（al-Ikhwan al-Muslimun）が考えられる。

ムスリム同胞団はハサン・アル・バンナーがイスマイリヤで一九二八年にはじめた運動で、ヨーロッパ資本主義に毒された現代人を、マホメット時代のイスラム教徒の敬虔さに立ちかえらせ、イスラム国家を建設することを主張し、体育強化運動、生活改善運動、労働組合運動を通じて組織をひろげ、ナセル革命にも協力したが、一九六五年のナセル暗殺未遂事件以来、非合法化して地下活動をつづけている。

ともにまことに興味深い報告で、質問が続出した。

夕食後、総括討論として新参加者の所感、大先輩たちの挨拶があり、翌十八日（水）の朝食後、正式に散会した。